



ア

人界觀(人界觀)としての人間觀(人間觀)

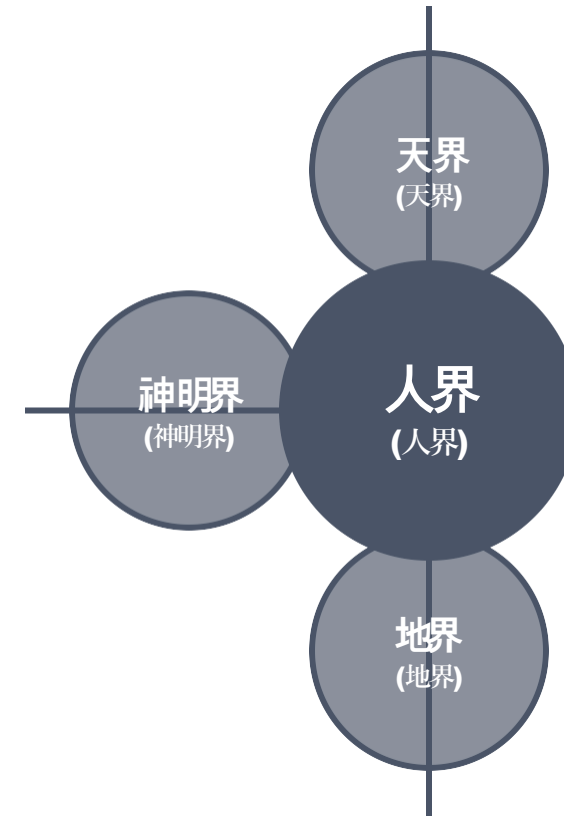
View of Humanity as View of Human Realm

目次

- 1. 人界観の概念
- 2. 九天の人身降世と意味
- 3. 神明と人間の関係
- 4. 修道と精魂の意味
- 5. 神・人陰陽論と役割
- 6. 三界システムと人界観
- 7. 近代東西文明と人界観
- 8. 結論および現代的意義

1. 人界観(人界観)の概念

- 人界観は人間世界を一つの有機的システムとみなす大巡思想の核心的観点である。
- 人間界は神明界、天界、地界と共に連結され宇宙の調和を成す。
- 大巡思想において人界は単なる空間ではなく、神明で満たされたシステムとみなされる。
- 「天地に神明が満ちているので、たとえ草葉一つでも神が去れば枯れ、土壁でも神が移れば崩れる。」(『典経』「教法」**32**)
- 人界観と人間観の違いは「界(界)」のシステムの性格にあり、事件が論理的に連結される方式に表れる。



2. 九天の人身降世と人間観

- 大巡思想の人間観は九天の人身降世から始まる。
- 姜聖上帝(姜聖上帝)という用語は人間界の姓(姜)を神位に加えることで九天が人間の身で降世したことを示す。
- 九天の人身降世により神明と人間の関係が逆転した。以前は人間が神明を探したが、以降は神明が人間を探すようになった。

「今、天地神明が運数の座を探して各人と各家庭を出入りしながら器局を試す。」(『典經』「教法」142)

- これにより人間は受動的な存在から能動的な存在へと位相が格上げされ、人間界は神界とともに天地公事の主体として浮上することになる。

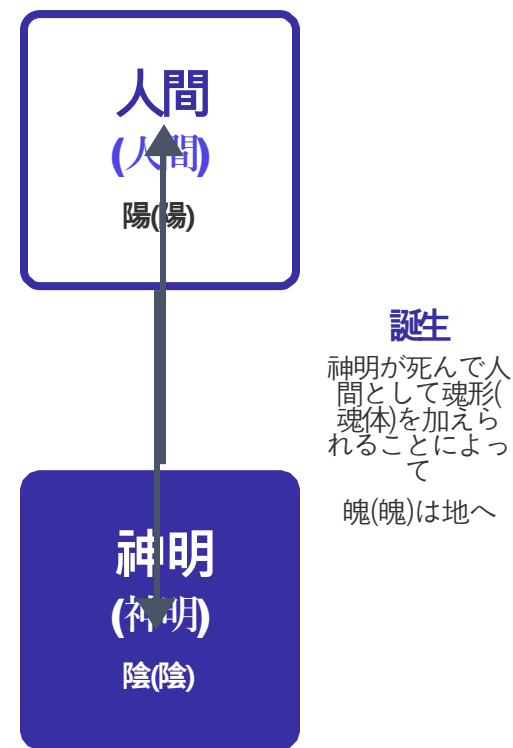


3. 神明(神明)と人間の関係

- 神明と人間は生と死の境界で区分され、相互循環的关系を形成する。
- 人間は死ぬと神明(神明)となり、神明が生まれると人間となる循環構造である。
- 魂(魂)と魄(魄)の概念を通じて死後の世界と現世を連結する体系を説明する。
- 人身降世以前は人間が神明を探したが、以降は神明が人間を探す関係の転換が起こった。

「人には魂と魄があり、人が死ぬば魂は天に上って神となり子孫の祭祀を受けるが、四代(四代)を超えた後は霊にも仙にもなる。魄は地に帰って四代が過ぎれば鬼になる」

- 『典経』 「教法」 1-50



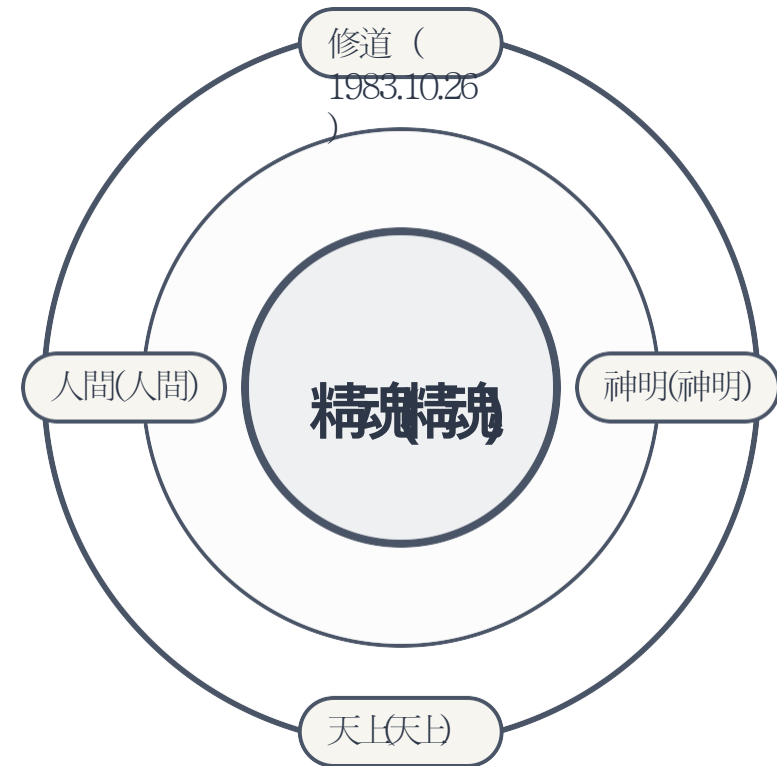
4. 修道(修道)と精魂(精魂)の意味

- 修道とは人間が精神修練を通じて精魂を固くする過程を意味する。
- 精魂は身体の精気神(精気神)のうち物質である精(精)と精神である魂(魂)が結合したもので、生きている時のみ持つことができる。

「道を修めた者はその精魂が固く凝集するので死んでも散ぜず天上に昇るが、そうでない者はその精魂が微弱で煙や水泡が消えるようになる。」(『典経』

「教法」2-22)

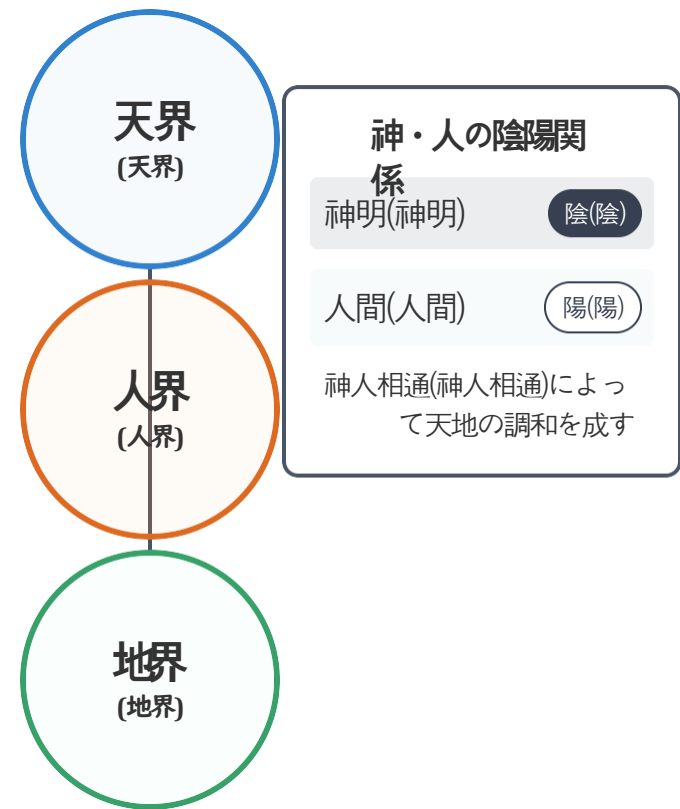
- 修道を通じて精魂が固く凝集した人間は死後も魂が散ぜず天上に昇ることができる。
- 反面、修道しない人間は死後精魂が微弱で煙や水泡のように消える。
- 大巡思想において修道は霊的生命の完成であり、修練を通じた精魂の強化が核心である。



5. 三界システム(三界)と神・人の陰陽論

- 三界は天界(天界)、地界(地界)、人界(人界)で構成される大巡思想の宇宙論的体系である。
 - 大巡思想では神(神)は陰(陰)に、人間(人)は陽(陽)に属する陰陽関係を形成する。
 - 神明は見えない次元を見ることができるが地上に変化を起こすことができず、人間は地上に変化を与えるが見えない次元を見ることができない。
- “神有人神陰人陽... 神人以陰陽成造化... 神人和而萬事成 神人合而百工成”

「神と人が陰陽の造化によって万事が成り、神と人が協力してこそ百の功が成る。」
- 神人依導(神人依導)の理法により神明と人間が互いに依り疎通して天地の道が完成される。



6. 人界観の現代的意義と結論

- 東洋と西洋はオリエンタリズムとオクシデンタリズムという両面的感情を通じて互いを認識してきた。
- 西洋の近代文明が東洋起源であることを忘却した100年余りの歴史の中で、危機状況の新たなパラダイムが必要となった。
- 大巡思想の人界観は人間の仲介的・接化的機能を組織的に強調する。
- 神人依導(神人依導)の理法(理法)は神明と人間が互いに助け世を変化させる代案的パラダイムを提示する。

「神人依導(神人依導)の理法(理法)で解冤(解冤)を主(爲主)として天地公事(天地公事)を報恩(報恩)で終結(終結)されるので」『大巡真理会要覧』、「趣旨」。

